

『武州公秘話』における谷崎潤一郎の美学の特質

PECULIARITY OF TANIZAKI JUN'ICHIRO'S AESTHETICS.

— On “The Secret History of the Lord of Musashi” (1932)

Mikolaj MELANOWICZ*

Tanizaki is well known in the world mainly as the author of “The Makioka Sisters” (Sasameyuki, 1943–48, tr. 1957) in Edward G. Seidensticker’s translation, and Howard Hibbett’s “Diary of a Mad Old Man” (Fūten rōjin nikki, 1961–62, tr. 1969). In the last decade Anthony H. Chambers’ “Naomi” (Chijin no ai, 1925, tr. 1985) and “The Secret History of the Lord of Musashi” (Bushūkō hiwa, 1932, tr. 1982) and Paul McCarthy’s “A Cat, a Man, and Two Women” (Neko to Shōzō to futari no onna, 1936, tr. 1990) and “Childhood Years. A Memoir” (Yōshō Jidai, 1955–56, tr. 1988) have enriched world literature.

The bizarre novel “Bushūkō hiwa” is comparatively less acclaimed, but in which the writer’s main features stand out in relief admirably well.

The hero in “Bushūkō hiwa” is characterized in principle as a

* ミコワイ・メラノヴィッチ 国際日本文化研究センター客員教授、ワルシャワ大学教授。文学博士。ワルシャワ大学卒。著書に『谷崎潤一郎と日本の土着的伝統の世界』『日本文学史概説』、論文に「Ethos in Novels by Jun'ichiro Tanizaki and Henryk. Sienkiewicz」、翻訳に谷崎潤一郎「蘆刈」「春琴抄」「蓼喰ふ蟲」「瘋癲老人日記」などがある。

paragon of the samurai' ethos and his fate also was typical of that of the Japanese warrior aristocracy in the Sengoku age of civil war. "Bushūkō hiwa", though different from "Ashikari" and "Shunkinshō" in that its leading character is male, in a story, nevertheless, the main events are caused by women.

Kaname ("Tade kuu mushi"), Sasuke, Shunkin ("Shunkinshō"), O'yū ("Ashikari"), Yaichi and Oichi ("Mōmoku monogatari"), as they appear in Tanizaki's novels, hold no concepts such as race, nation, native country or faith. The concepts that extend beyond the individual have no decisive influence on their thought or behaviour. Only cultural and aesthetic inducements and inmost impulse move them. A combination of these two factors is depicted most vividly in "Bushūkō hiwa", especially in a scene where a beautiful young woman is purifying a severed head with the hero looking on. The decisive and absolute factor for the hero, that is aesthetics, will be discussed in the paper.

序文

現在思い出してみますと、私は谷崎文学を「刺青」から読み始めたように思いますが、この作品はまだ人々が今のように激しくきしみあっていなかった時代、「愚か」という尊い徳を持っていた昔のことを書いたものです。この「愚か」という意味について、ずいぶん後になって、評論家の磯田光一が「愚かの美学」という本で、谷崎の生き方と文学について非常に面白い論を展開していたわけですが、私にとっても、この「愚か」という言葉が、谷崎文学を味わうためのキーワードのひとつになっていると思います。その後、「富美子の足」や「痴人の愛」、「卍」、「吉野葛」、「盲目物語」、「芦刈」や「春琴抄」など読ん

で翻訳もこころみたわけです。土着的伝統を研究していたときに「陰翳礼賛」、「饒舌録」、「恋愛及び色情」などの評論を興味深く読んでいました。それで谷崎の美の意識とは直接理解することもできました。今回は小説「武州公秘話」を中心にして谷崎の美学の特色を考えることにしました。そのまえに潤一郎は若い時になにを読んでいたかを見てみましょう。

歴史小説と大衆小説

谷崎潤一郎はどういう文学がすきでしたか、どういう小説を読んでいたか、それを知るために、彼の「直木君の歴史小説について」という昭和八年の時評というか評論を見てみましょう。

近頃の少年たちは、どうであるか知らぬが、私などが十二、十三歳の時分、初めて小説本という、面白い読み物のあることを知り、それに親しみを覚えるようになったのは、主として歴史を題材とした物語、いわゆる歴史小説が世に行われていたお陰であって、現代を扱った作品に興味を感じ出したのはやや成人してから後、先ず中学の一二年頃からである。(全集、二十巻、473ページ)

と述べ、その続きを読みますと、谷崎潤一郎が少年時代に何を読んでいたかがよくわかります。何人かの小説家の名前が出ておりますけれども、専門家以外にその名前を知っている人は少ないでしょう。

……消え去った記憶を辿って行くと、おぼろげながら、村井弦斎の「桜の御所」とか何とか云った題の歴史物を思い浮かべる。(……) そうして今もその時に受けた感銘を忘れずにいるのである。

と谷崎は述べます。そのほかは幸田露伴の有名な「五重の塔」といったものではなくて、「縁外縁」(後に「対髑髏」と改題)などを読んでいます。さらに、石橋忍月など、現在誰も読んでいないようです。

谷崎は少年時代からいわゆる英雄を崇拜し、武将の話などを好んでいたことがわかります。また当時の大衆小説作家、直木三十五、大仏次郎、中里介山な

どの出現を非常に喜ばしい現象と見ており、日本の小説にも良いものが出てきたと、次のように云います。

大仏君や直木君のような器用な作家が出てきたというのは、そういうふう
に全体の文学的な教養が進み、技巧の水準が高くなってきた結果であ
って、この分では、やがては「クオーヴァデイス」のようなスケールの
大きな作品が現れることも、遠くあるまい。

と書いております。

ちなみに云っておきますが、「クオーヴァデイス」はシェンキェヴィッチと
いうポーランドの代表的な小説家が一八九六年に書いたものですが、谷崎がど
うして「クオーヴァデイス」を知っていたのか、それについては「早稲田大学
における坪内逍遙のシェンキェヴィッチ講義ノート」という面白い資料を吉上
昭三教授が「ポロニカ」（創刊号、1990）という年間誌に発表されました。そ
の資料によりますと坪内は早稲田大学で講義するために記したノートにおいて
詳しく「クオーヴァデイス」について書いたわけです。その講義を聞いた人の
中で「クオーヴァデイス」を英語から日本語に翻訳した松本雲船が居ました。
その翻訳書を谷崎も読んだ様ですが、シェンキェヴィッチの作品の中に出てく
る歴史的な事実とフィクションの関係に興味を持ったようです。シェンキェヴィ
ッチはローマ皇帝のネロの時代のキリスト信者の苦しみを通じて母国の状況を連
想させようとした。特にそのほかの作品の中にシェンキェヴィッチがたい
へん強く注目したのは騎士道のエトスでありました。滅亡した国ポーランドの
民族意識を持続させるためには、シェンキェヴィッチはポーランドの英雄談の
ようなものを書き、騎士道の価値観の役割を探ろうとしました。祖国、聖母マ
リア崇拜、名誉、勇気などが騎士道を重んじる主人公たちの基本的な気質をな
していたといっても言い過ぎではありません。谷崎の場合はどうであったか考
察してみましょう。

谷崎の大衆小説に対する執念をいちばんよく示すのは「乱菊物語」や「武州

公秘話」でありまして、かれの作品の系譜から見ますと随分違うもの、または別格のものでありましょう。

「武州公秘話」（「新青年」）という長編小説は力をいれて書いたものです。前期谷崎の作品によく出てきた変態性欲を取り扱った時代物になりました。そういう小説を書く動機にはシェンケヴィッチ小説のほかには少年時代に見た歌舞伎「義経千本桜」の場面にヒントを得たことは、随筆集「雪後庵夜話」にふれるところがあります。谷崎のいわゆる大衆小説で、成功したものであります。「乱菊物語」と違って、興味深いストーリーはよく構成されて、自然に流れています。

主人公法師丸、のちの武州公が、人質となって敵城にいるあいだに、切りとった大将の首を洗って化粧する場面をみて興味を覚え、次第に性倒錯に陥って行く過程を描いていたのであります。その作品の構成には奇想天外の出来事のおもしろさや怪奇趣味がまずめだちます。中心になる女性主人公の桔梗の方は大名の息女で高貴な女性として登場しますが、その役割はあえて高貴的であるかどうかはべつの問題で有りましょう。ではその変態性欲や奇想天外の出来事以外には何か日本の文化の基礎に流れている思想の流れと関連するものがあるかどうか考えてみましょう。

「武州公秘話」の男の主人公武蔵守輝勝は原則的に武士の典型から余り違わない様に思います。少なくともその主人公の外側のふるまいは他の武士とちがわないでしょう。その運命もまた、戦国時代の日本の貴族や高層武士の典型的な状況を表現するのでしょう。谷崎が扱ったこの武士の典型はつとに記録に定着して現れ、文学作品を通じてよく知られているようなものでありましょう。しかし注目すべきことは、谷崎はよく知られた手本通りに主人公を作り上げることに甘んじたわけではなく、それどころか、なによりも先ず、記録の作者が黙って通した人間生活の諸相を表現しようとした。つまり十七世紀までに伝統の定着してしまった人間の型は、そこでは心理描写、さらに忠実な武士の理想とは相容れないような行動の描写によって補充されました。倫理的動機をさ

らに心理的なものや美的動機と妥協しているわけです。

輝勝すなわち武州公は、江戸文学における人間関係であれほど重要な要因となった義理、つまり道義的債務感がまったく欠けているわけではないのです。それに、主君、主人への忠誠という武士道の重んじる価値観に無関心なのでもないでしょう。実際、かれの置かれていた状況から考えてみれば、小さい時から自分の一族の敵であった筑摩家に対する忠誠が必要なのかという疑問の余地がありました。それなのに、長い間筑摩家の屋敷に仕え、桔梗の夫となる筑摩家の息子とほとんど対等の待遇を受けるにいたります。それで、恩義をうけた河内の介（のちの武蔵守）としては、いつまでたっても筑摩家の総領息子則重に忠実につかえなければならなくなりました。つまり復讐の必要も痛感せずですんだのです。しかし、それにもかかわらず、筑摩家の主君の美貌の妻の不義の証拠を発見したとき、それを主君に知らせはしませんでした。

輝勝は立場の複雑さを理解しようとしたが、主人に対する家来の感謝と義務という要因の重要性を多少感じました。しかしながら自分の先祖への忠誠に対しての道義の方は、筑摩家を倒して、則重とその美しい妻桔梗を捕らえるというあらかじめの計画実現に役立つ口実を根拠づけただけにすぎません。（桔梗などが捕らえられたか負けた則重に殺されたかは明らかではありません。）

「武州公秘話」の主人公は男ですが、「芦刈」や「春琴抄」と同じように、重要な出来事の原因はやはり女である物語です。作者の注意は支配者の英雄的行為ではなく、史伝がいつも黙り通して来た側面に集中しています。谷崎はサド・マゾ的性質をそなえた主人公の性生活を凝視して、同時に理想的美貌の女をその男の夢のように捕まえにくいものにします。大体「芦刈」や「春琴抄」の人間関係のように、その好きな女性を側に引き留めておけないありさまを提示します。桔梗にしろ妻のお悦にしろ、彼のひねくれた趣向に自分を完全に任すことが出来ません。彼女達は世間一般の決りの範囲にとじこもっていますが、ある目的を達成するためだけに残酷なほどの態度をとる場合があることはありますが、男は道徳的原則を破ってしまうのですが、幸福を得るわけではなく、

不安と苦悩を味わったあとで、最後にはついに敗北します。

谷崎はこの小説の冒頭で、悪人も善人もいないとはっきり断っています。

つらつら武州公の行状を考えると世の中には善人も悪人もなく、豪傑も凡人もない。賢き人も時には浅ましく、猛きひとも時には弱く、きのう戦場に於いて百千の敵を取り挫いだかと思えば、きょうは家に在って生きながら獄卒のしもとを受ける。(全集、186ページ)

個々の人間は一定の条件の下で意識的無意識的に喚起されると、悪にも善にも現れることがあります。そのことを谷崎は述べているようです。よく人の引き金によって、自分の行く末を規定してしまうのでしょうか。谷崎の主人公の運命を良くみると、この眠っている悪の本能を呼び覚ますのに、決定的な役割をはたしているのは、美、特に魅惑的な女性の美であるとわかります。女性の美しさには、主人公の想像力を動かす大きな力があります。その美は悪の本能の琴線にふれ、かれの行為を決定します。結局残虐の亡霊とも言うべきものが絶えずつきまとっています。この意味では女性は歴史の成りゆきに影響をあたえます。女が原因となって、陰謀が起り、戦争も起ります。一族も崩壊します。つまりこの小説の女主人公は決して消極的ではなく、歴史をつくる舞台裏の活動に積極的に加担していることになります。戯曲「顔世」(一九三三年)でも女性の美しさが破壊的な力となっており、また「無明と愛染」(一九二四年)では、女性の好色が坊主の運命を変えてしまいます。

谷崎は美を理想化して描きます。そのために女性と男性の主人公の間、さらに女性と観客、あるいは読者の間に距離を置くのがいちばんいいと考えています。谷崎は理想的な女性美というものが存在することを暗示し、この美が主人公の運命、さらに歴史の成りゆきにまで影響すると考えています。それは近づき難く、得られようもないものであります。美しい女性が理想であり続けるのは、距離が保たれていればこそであります。この命題を立証しているのが、谷崎の多くの作品であります。すなわち「春琴抄」、「芦刈」、「盲目物語」、「顔世」、「少将滋幹の母」、そして「武州公秘話」であります。

谷崎はあきらかに、「永遠の女性」の肖像画の素描を作り上げたのです。つまり、独特の教育規範で教育された数世紀前の日本女性についての習作をこころみたのであります。この規範に従って、女性は感情を隠すことを余儀なくされてきました。柔順でか弱い存在でなければならなかった女性は、自分の運命や幸福を決定する権利を持っているものに服従しなければならないありさまでした。谷崎は女性のそういう美的および社会的規範に、自身魅了されるようになりまし。同時にまた、封建社会が女性に被らせた仮面の下をのぞき込むこともこころみました。そうすることによって、歴史の記録や絵に描かれた肖像から窺われるような柔順性だけではなく、残忍で横暴な性質を読みとることができました。女性も、男性と同じように、善いも悪いもないのです。それは一定の境遇のなせるわざで、残酷になったり優しくなったりしたのです。ちなみに言えば、ヨーロッパほど罪も地獄も恐れる必要はなかったはずです。もちろん、忠義忠誠に背いたことがばれると、流罪や死刑になる恐れもありました。小説「武州公秘話」の輝勝と桔梗の関係は、二人とも死刑になってもおかしくないので、それゆえ、共謀するにあたっては、最悪の場合の覚悟をしなければならなかったのです。戦国時代の有り様の広大な眺望を背景に、主人公の運命と死の影をまとった生の一断面を描き出しているわけです。支配欲、征服欲、残虐行為、武士の行動を規定する厳格な規則、人間存在の無常、運命の変転などのさまざまな世界観の特徴が、この作品を十六世紀から十七世紀にかけての合戦や武人物語にむすびつけます。この小説の題材はその時期の記録、史伝からとられていて、また、そういう記録を真似た、谷崎の空想の出典からなるのです。

谷崎の作品においては、主人公の成長、成熟、変化を語ることは難しいです。もちろん、主人公は年をとり、経験を積むのですが根本的な内的変化は蒙らないようです。始めにあった性質が最後までかれらにうかがえます。そういう性質が最もよく現れるのが、美の脅迫観念、つまり、異常な美しさの女を得ようとする意欲であり、そして被虐的趣味を蔵した献身への傾き、あるいは加虐的

趣味を備えた支配、虐待への傾きです。要、佐助、春琴、お遊、弥市、輝勝、桔梗などの主人公にとっては、国家、祖国、信仰といった観念は存在しません。したがって、こういう超個人的構造を持つものは、かれらの思想、性格、世界観の形成に決定的な力をもっていません。かれらにとって問題となるのは、文化的動機と心の奥底に潜む衝動だけにあります。その二つが錯綜している有り様が最もはっきり描かれているのが「武州公秘話」で、とくに、美しい娘が切られた首を清めている場面であり、主人公がそれをながめている場面です。これらの主人公にとって何か決定的、絶対的なものがあるとすれば、それは、美、とくに女性の美と緊密に結びついたものでありましょう。かれらの人生には、存在とか人生とか愛についての哲学的詮議はありません。この作品にあるのは、歴史を背景とした特殊な人間生活ですが、それは伝統的な耽美主義の衣装をまとったものです。谷崎の主人公の多くを特徴付けるのは、人間にとって考えられる限りの、美に対する昔ながらの渴望なのです。かれは思考する人間というよりも感じる人間であります。そういう人間にとっては、美が「善」の観念とほとんど同じ意味をもっています。このような主人公像に、平安時代の宮廷から伝統を引いた教育以外、江戸時代の町人の理想も合わせられています。感情を隠して、表情を押さえる必要性を重んじた倫理的根拠が、その基をなしているのです。女性であろうと、男性であろうと、不満や絶望のために顔をしかめることはしてはいけなといったしつけでした。

そういうわけで、文化的美が谷崎の美学のいちばん大事な要因になっています。日本文化の主流をなす教育の規則や、芸術の形や、人間関係の規範は、美を追求する基礎になっていたわけです。谷崎にとって美しいこと、美しいものは、まず人間によって創造されたものでした。多い場合には人工的な美でした。よく言えば理想化された美の意識がはたらいていました。現実の世界にあるものを夢幻世界に置き換えることによって、いっそうそれを美化し、理想化したといえます。だから現実の、実際の世界というより、舞台に設定された、芝居

化された世界の美を描いたともいえます。「源氏物語」のもののあはれの伝統を否定しないで、江戸の町人文学の理想をふまえて 谷崎なりの美をつくりだしたといっても言い過ぎではないでしょう。醜悪と美、悪と善という観念を相対的に扱って、絶対性を否定しながら、美と善の関係を追求しながら、空想の世界をつくりあげたのです。川端康成と違って自然の美や純粹な心という“日本的”な美学の流れにそれほど強い関心を示さなかったようです。又人間の容姿の美、とくに若い女性の美や、その行動の美、また時の経過につれて美の破壊作用を、新鮮に、詳細に描写し得た川端康成とは対照的に、異なる味わいのある美学を主張した文学者でした。どちらかといえば、谷崎の文学の場合は、もののあはれより歌舞伎の美学のほうが——意識的であろうと、無意識的であろうと——なじみやすい価値を持っていたと思います。ですから谷崎の美学を考察するときに江戸文化との関係をもう少し詳しく調べる必要があると思います。

谷崎潤一郎全集、中央公論社、1982、二十卷

The Secret History of the Lord of Musashi and Arrowroot. Tr. by Anthony H. Chambers. Charles E. Tuttle Co., Tokyo 1984 (1982)

討議要旨

藤花学園高校の山田義博氏から、谷崎潤一郎と川端康成の比較の観点からの意見が述べられた。